

女子もふんどし姿になった相撲の授業

初めて相撲の授業を受けた、忘れられない一日の話。体育の新任教師は22歳の山田弥奈先生。先生はとても美人で、長い黒髪をポニーテールにまとめていた。

「えっと、みんな、静かにして聞いてくださいね。」弥奈先生が少し頬を染め、照れくさそうに言った。「今日は相撲の授業です。まずは...廻しを締めることから始めます。男子から、えっと...服を全部脱いでください。」

え？脱ぐ？ここで？校庭の真ん中で？女子たちがすぐそこにいるのに？周りを見ると、クラスメイトの男子全員が目を丸くして固まっていた。隣に並んでる女子たちは興味津々な目で俺たちを見つめていた。梅歌は長い髪を耳にかけ、ニヤニヤしながら「うそ、男子全部脱ぐの？マジで？」と友達に囁き、紗季は友達と肩を寄せ合い、「え、

ちょっと、めっちゃ面白そう！」とクスクス笑い、頬を少し赤らめていた。朋子は腕を組んでクールに「ふん、男子だけ脱ぐのってウケる」と余裕の笑みを浮かべ、鋭い視線で俺たちを観察。加菜子は恥ずかしそうに俯き、「やだ...見るの恥ずかしい...」と小さな声で呟き、美咲は「え、うそ、ガチで脱ぐの？」と目を輝かせ、彩は「うわ、めっちゃ笑えるんだけど！」と笑い、結衣は「え、恥ずかしい...でも、ちょっと見たいかも...」と顔を赤らめてチラ見。他の女子たちも動揺していた。

「え、先生...本気ですか？ ここで脱ぐんですか？」武が震える声で言ったけど、弥奈先生は首を振って、優しく、でもきっぱりと言った。「うん、そうだよ。相撲は力士はちゃんと廻しを締めるんだから。恥ずかしがらなくていいよ、みんな一緒だから。ほら、早く、準備して。」

俺は震える手でTシャツを脱ぎ、地面に投げ、次に短パンのボタンに手をかけたけど、指が震えて、なかなか外せなかった。チラッと周りを見ると、他の男子も同じで、ゴソゴソと服を脱いでいく。やがて全員がパンツ一丁に。俺は地味なグレーのボクサーパンツだったけど、武は白いブリーフで、女子の視線が一気にそっちに集まるのが分かった。梅歌が「やだ、なにこのブリーフ...めっちゃダサいじゃん！」と声を上げて笑い、汗で濡れた髪を耳にかけ直し、頬が赤く染まった。紗季が「え、うそ、武、めっちゃ恥ずかしそう！」とはしゃぎ、朋子は「ふん、ブリーフダサすぎ」と冷ややかに笑い、加菜子は「やだ...見ちゃダメなのに...」と顔を赤らめて俯き、指で体操着の裾を握りしめ、膝が震え、汗が額から流れ落ちた。たくさんの女子に注目された武は耳まで赤くして、地面を睨み、汗が顎からポタリと落ちた。

「はい、えっと...パンツも脱いでください
ね。」弥奈先生の声が少し上ずり、頬がさら
に赤く染まった。「力士はパンツの上から廻
しを締めないから。ちゃんと...。ほら、勇気
を出して、ね。」彼女の声は優しかったが、
逃げ場がないことを突きつけられた。

「マジかよ...これ、ガチで？」武がうめくよう
に呟き、亮太に「なあ、お前どうすんだよ」と
肘でつついた。亮太は「知るかよ！ やるし
かねえだろ！」と小声で吐き捨てた。俺も信
じられなかった。パンツの上からでいいと
思ってた。相撲なんて、ちょっとカッコいい
し、女子と一緒にやれるなら楽しいかも、な
んて淡い期待すら抱いてたのに。こんな屈
辱が待ってるなんて。女子たちの視線が突
き刺さる中、俺は震える手でパンツのゴム
に指をかけた。意を決して、グッとパンツを
下ろす。冷たい空気が股間に触れ、思わず
両手で隠した。肌がピリピリと縮こまる感
覚。他の男子も同じで、一人、また一人とパ

ンツを脱ぎ、裸で立ち尽くす。俺たちのおちんちんはまだ包茎で、先端の皮に包まれた亀頭が完全に隠れていた。